
別れ話

常盤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別れ話

【Zコード】

Z9847L

【作者名】

常盤

【あらすじ】

ケイとモヒの別れ話。

草食男と一歩間違つとだめんずウォーカーになりそうな女の子つて
気がします^ ^ ;

(前書き)

長編の作成が遅れまくっているので、ちょっと書いてみたものです。

「別れたいの」

テーブルに向かい合わせに座り、モエはケイにそう切り出した。

「なんで？」

突拍子も無い話にケイは耳を疑つた。

モエとケイは付き合って1年になる。

喧嘩も言い争いもした事はなく、モエはケイにいつも優しい眼差しを向けてくれていた。

そもそも、男女問わず多いケイの友達の一人だったモエが告白する形で始まつた関係だつた。

ケイは、モエを束縛しない。

モエも、ケイを束縛しない。

それでも、お互に大切に想いあつていると信じていた。

先日会つた時も様子は変わらなかつた筈なのに、別れ話となつていうことだろう。

ケイは思い当たることを考えたが全く思いつかない。

「冗談…」

「私つてそんな冗談が言えるタイプじゃないから。」

モエは笑つた。

その通りだ。

モエは、こんな話を冗談で言つタイプではない。

真面目で、慎重で、少しお調子者のケイをなだめながらも優しく見守つている感じだった。

でも、それは今、ケイにどつては慰めにもなりはしない。
慎重なモエが別れたいと言い出したと言つ事は、じっくり考えた結論なのだろう。

「どうして…」

「ゴメンね、私から好きだつて言つておいてケイは納得できないかもしぬないけど、一年付き合つて出た結論はこれしかなかつたの。」「

じゃあ、とモエは立ち上がる。

引きとめようとケイは手を伸ばすが、モエは少し身体を引いて届かないように避けた。

「あらがとう、私の告白に答えてくれて。1年、楽しかったわ。」

モエはいつもおりの優しい微笑みを残して、部屋を出て行つた。

残されたケイは呆然とした。
なにがあつたんだろう。

ケイはふと思いつき、携帯を取り出す。
アドレスから、モエと仲が良かつたと思われる人物を思い出して、電話を掛ける。

「ケイ?..どつしたの。電話なんて珍しい」

モエが別れ話をしてきた、訳がわからないこと言つて、電話の向いつで溜息が聞こえた。

「ねえ、本当にわからないの?」

「ああ…」

「…わからないから、振られたの。モエはあなたを恨んでも憎んで

も居ないし、つこでにそのうち隠ひだりから言つておけば、新しい男も居ないよ。」

「じゃあ、なんで」

「モエは、自分を責めてた。私はケイを詰つてもイイって散々言ったのに。自分が好きになつたのはそのままのケイだからって、それを受け入れられない自分が悪いって言い続けてた。でも、私、モエは心の広い、とてもイイ子だと思う。なのにケイを丸ごと受け入れられないのは自分の心が狭いからだつて……」

電話口から聞こえる声にケイは更に愕然とした。

感情を抑えるように暫く間があつて、再び語りだした。

「細かい事を言い出したらキリがないから。ねえ、ケイ。あなたはモエを何だと思ってたの？」

そう言ってブツツリと電話が切れた。

なんだかわからない。

モエは、ケイの事が好きだつた。

ケイを受け入れられないとはどういうことだろ？

モエが充分自分を受け入れてくれていたのではないのだろうか？

ケイ自身はモエに不満を抱いた事など無いのに。

ケイは、別の友人に電話を掛けた。

モエと先の電話の人物とも仲が良いはずの男友達だ。いきさつを話すと、ふうん、と気のない声が聞こえた。

「んで、ケイはどうしたいわけ？」

「モエと別れたくないと思つてんの？」

「モエと別れたくないと思つてんの？」

「そりや…」

そうだ、と言おうとするがそれに被せるよりと言われた。

「じゃあ、なんで今追いかけないの？」

「…」

「ケイさあ、モ工ちゃんに好かれた事に喜んでたけど、モ工ちゃんに執着しないよね？ 追いかけたいほど好きじゃないよね？」

「そんな事…」

ケイはモ工の事が好きだ。
でも執着という意味がわからない。
ケイは、人にも物にも執着しない。
そういう性格なのだ。

「ケイは、モ工ちゃんが居なくても平気。それにモ工ちゃんは気付いた。それだけの事だよ。」

わからなかつた。

モ工は、ケイが居なくとも平気なのだろうか？

ケイの事が好きだと笑って恥ずかしそうに笑つたモ工は、ケイが居なくても平気なのだろうか。

別の友人に電話をした。

彼は「へえ」と言った。

「モ工ちゃんが、お前をとつとつ見限つたわけか。残念だったな、ケイ。あんな心の広い子はなかなか居ないだろう。」

モ工を知っている友人に次々と電話をした。

「ああ、そう。よく1年もつたよね。モエは、ケイの事を良く見て理解してたから。」

「モエちゃん、痛々しかったから。最後は笑ってた?良かつたね。」

「一言も責められなかつた?それはモエ最後までケイの事を想つてたんだね」

掛ける相手掛ける相手ほとんどに、モエはケイを想つていて、頑張つていたといわれた。

モエはケイの悪口や不満を言つた事はなく、ケイの為に心を碎いていたと。

ただ、一人の友人に言われた。

「モエは、ケイの事を想いすぎて、自分の心を碎いてしまったの。もうモエを離してあげて?」

どうせ、追いかける気はないのだろうから。
といわれた。

追いかけるべきなのだろうか。
別の友人に聞いてみた。

「追いかけるか追いかけないかはケイの心の問題だけど、そんな事を俺に聞いている時点でお前にモエを追う資格はないよ。」

甘えるなよ、そういわれた。

それから、モエには会つことも無く。

避けられているのか、学校の中でも会つ事は無かつた。

モエと共通の友人達は、それ以来口を噤み、何も言わなかつた。

数年が経ち、ケイも友人達も社会へ出て働き始めた。

それぞれにいろんな事情があり、疎遠になり、ケイは新たな友人関係を作り上げて行った。

社会人になれば色々な確執もあるが、それなりにやつてきていた。ある日、ケイは仕事の関係でアメリカへ渡った。

そこで、目の前に現れたのはモエだつた。

取引をする予定の会社で秘書を務めていると挨拶をした。

ケイは動搖を抑え、名刺を交換した。

モエは全く表情を変えず、優雅で丁寧で、淀みの無いビジネスマナーとした微笑で対応した。

相手企業の社長と流暢な英語で会話をしているモエは昔とは全く違う女性に見えた。

ケイは、声を掛ける事も出来ず、モエもケイに個人的に話しかけることも無かつた。

モエは、昔より綺麗になつていた。

帰国し、慌てて、昔の友人の携帯番号を探す。

もう使えない番号もいくつかあつたが、モエと仲の良かつた女性に繋がつた。

「へえ、モエに会つたんだ。かつこいい女になつてたでしょ？」

そういうつて笑つた。

「ケイと別れた後、すぐに留学したの。私達は口止めされてたんだけど、そんな必要なかつたわね。ケイは一度も私達にモエの居所を聞かなかつた。だから私達は納得したのモエの判断は間違つてなかつたんだってね」

もう、随分昔の話になるものね、と言つて彼女は当時には言わなかつたいろいろな事を教えてくれた。

「モエは、ケイの八方美人的な部分も好きで、でも自分の想いだけが大きい事に苦しんでた。ケイは友達優先で、モエのことは常に2番目以下。それも、モエは許容しようとしてた。でも、ケイにはちゃんと遠まわしに伝えていたはずよ。でも、いつもケイはモエの話を半分も聞いてなかつた。ほとんど聞き流したんじゃない？」

言われてみれば思い当たる。

モエは自分を好きだから、このくらいは許されると思つて甘えていた。

それがモエの中でどんどん失望に変わつて言つたんだと、今は理解わかる。

「あの時はモエがかわいそうだつた。でも、この前モエと話をしたの。彼女、言つてた。あの頃は皆子供だつたんだつて。モエもケイが初めて付き合つた相手で、必死だつたからバランスがわからなかつたんだつて。モエは、そういうながらもあの時に気付いていたんだと思う。ケイが自分の好意に甘えていて、自分は甘えられる事に依存しているんだつて。このままじゃあモエもケイも一人で立つて歩けないから、全部リセツトしたかつた、ケイには悪いことをしたのかもしれないけど、後悔はしていないつて言つてたわ。」

で、どうだつた?と聞かれ、素直に思つたままにケイは答えた。

「綺麗だつた。かつこよかつた。あんなモエが居たなんて知らなかつた。俺にとつては優しいモエだつたけど、モエはあんな強いところもあつたんだな。確かに俺はモエの好意に胡坐をかいて甘えていたんだよ。」

あの時追いかければよかつたと笑うと、そんな気無かつたくこと電話の向こうでも笑い声が聞こえた。

「ケイもちょっと変わったよね。モエには敵わないだろ？」「そうだな、もう少しモエに惜しんでもらえるように頑張るよ」

笑いながら「がんばれ」と言われ、その内、当時の瓶で飲もうと話して電話を切つた。

ケイは、アメリカで見たモエの面影を脳裏に描いた。

フワリと微笑む顔は昔の面影を残し、仕事の話には厳しく真面目な眼をし、周囲からとても信頼され、それに応えるモエは、ケイの遙か上を歩いて行つてゐるよう見えたし、実際そうだらう。

眼を閉じ、過去のモエに「無神経で鈍感な男で「ゴメン」と謝る。ケイは、あの時の思いが心の中で完全に消えるのを感じた。どこかで、モエはいつまでも自分を好きで、戻つてくれるとも思つていた。

でも、今のケイにモエが戻る事は無いと解つた。

今の綺麗なモエの横顔を思い浮かべ、心で話しかける。

「さよなら、あつがどう」と・・・。

(後書き)

実際の別れ話は、感情的になりがちですがそういう部分をザックリ省いて、冷静な別れ話を描いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9847/>

別れ話

2011年1月4日02時55分発行